

春まきストックに関する試験

一 品種と播種期および摘心について一

遊 佐 吉 雄

(宮城県農試)

1. ま え が き

東北における露地切花は気候的な制約が大きく、したがって生産される花きの種類は乏しい。特に5月下旬から6月にかけてその傾向が著しい。今後はその気候条件に適応した切花栽培の検討が必要である。

本試験は花きの種類としてストックを選び、春まき栽培における特性を把握するため、品種と播種期の関係、分枝系品種の摘心処理が生育開花にあたる影響について検討したのでその結果を報告する。

2. 試 験 方 法

実験Ⅰ 品種と播種期について

供試品種はノンランニング系の青苑・南の誉(低温要求度大)、初恋(低温要求度中)、先勝の雪・白王(低温要求度小)の5品種を用いた。

播種期は6月上・中旬の開花を目標として、2月10日まき、2月20日まき、3月1日まきの3区をもうけた。区制は1区面積5m²(30株)で3区制とした。

仮植は播種後15日でおこない4月24日に定植した。な

お、定植後はビニールトンネルで約3週間被覆した。

実験Ⅱ 摘心について

供試品種はランニング系の黒川早生・寒千鳥・アーリーローズ・ヨセミテ・シャスターの5品種を用いた。

摘心処理は本葉7枚時、10枚時、13枚時の3区をもうけた。その他の管理は実験Ⅰの設計に準ずる。

調査はⅠ、Ⅱとも開花までの生育、特に切花時の花の品質および採花期間とした。

3. 結果および考察

実験Ⅰ 品種と播種期について

開花期における生育の概要は第1表に示したとおり、草丈の伸びは各品種とも2月20日まきが最もすぐれ、2月10日と3月1日の区間では低温感応性の小さい先勝の雪・白王で3月1日まきが2月10日まきよりすぐれている。このことは花部の生育でも同様で、花穂長の草丈に対する比率は2月20日まきと3月1日まきで良い傾向にある。

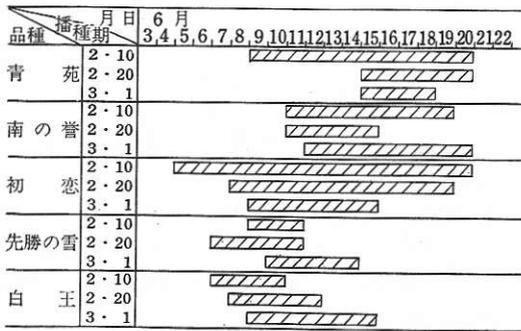
切花品質ではストックの場合、草丈に対する花穂長および花数が問題となるが、さらに茎部の生育特に葉数と

第1表 開花期の生育調査

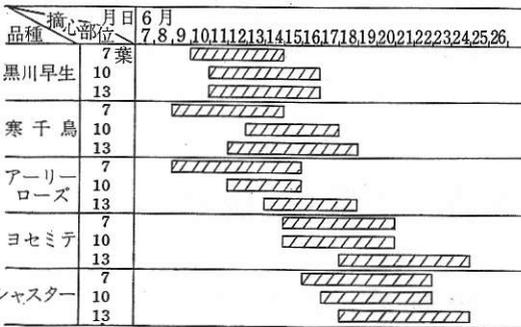
播種期	品種	項目	生育調査			
			草丈 cm	花穂長 cm	花数 コ	花穂比率 %
2月10日	青南初先勝白	苑	37.2	10.9	23.0	29.3
		の	38.0	11.2	22.7	29.5
		勝	33.1	11.6	19.8	35.0
		の	38.5	8.2	22.5	21.3
		雪王	35.3	12.4	21.5	35.1
2月20日	青南初先勝白	苑	40.2	10.4	22.0	25.9
		の	38.3	11.1	21.3	29.0
		勝	39.9	11.0	22.6	27.6
		の	40.9	8.7	25.7	21.4
		雪王	40.7	19.1	23.0	46.9
3月1日	青南初先勝白	苑	32.7	12.1	23.3	37.0
		の	32.7	9.8	22.0	30.0
		勝	27.3	11.9	18.1	43.6
		の	39.5	8.4	19.3	21.3
		雪王	37.1	14.4	22.7	38.8

第2表 開花期の茎部調査

播種期	品種	項目	茎部調査		
			茎長 cm	葉数 枚	節間長 (平均) cm
2月10日	青南初先勝白	苑	26.3	30.9	0.9
		の	26.8	30.4	0.9
		勝	21.5	26.3	0.7
		の	29.3	31.1	0.9
		雪王	22.9	25.7	0.9
2月20日	青南初先勝白	苑	29.8	33.5	0.9
		の	27.2	32.2	0.7
		勝	28.9	29.4	0.7
		の	32.2	34.4	0.9
		雪王	21.6	17.9	1.2
3月1日	青南初先勝白	苑	20.6	30.0	0.7
		の	22.9	31.5	0.7
		勝	15.4	23.9	0.6
		の	31.1	34.6	0.9
		雪王	22.7	18.7	1.2



第1図 播種期別の開花期間



第2図 摘心部位と開花期間

茎長との関係が品質に影響すると思われる。

葉数と茎長との関係は第2表に示すとおりである。品種間の差は認められるが、2月20日まきが茎長および葉数ですぐれ、節間長では3月1日まき、2月20日まきが短くバランスが良い傾向にある。

次に播種期の相違と開花期間との関係は第1図に示すとおりである。すなわち各品種とも開花時期には大巾な開きは認められないが、開花始期から開花終期にいたる期間には差が認められる。播種期との組合せでは青苑・南の誉・初恋で早期播種が長くなっている。開花の時期は6月上旬から中旬までの気温上昇期にあたるので、切花の日持ちにある程度影響があると思われる。開花期間は処理区のみでは2月20日まきの平均開花期間が約5日間であるので実用上問題はない。

これらの結果から、春まきストックの品種は低温感応度の低い先勝の雪・白王等を中心とした組合せにすると、播種期は2月20日頃が適当と考えられ、開花時期は6月上・中旬になる。

実験Ⅱ 摘心について

摘心処理部位による開花期の生育は第3表に示すごとく、各品種とも摘心時の葉数が多い区で草丈の伸びが良

第3表 摘心処理部位による開花期の生育

品種	摘心部位	項目		
		分枝数	草丈	葉数
黒川早生	7枚	2.2	48.1	14.6
	10	3.0	51.5	13.2
	13	2.6	50.8	13.4
寒千鳥	7	3.8	51.8	15.5
	10	4.0	52.8	16.0
	13	4.3	54.3	14.3
アーリーローズ	7	4.0	43.6	12.4
	10	3.0	46.4	12.8
	13	5.5	46.3	12.6
ヨセミテ	7	4.0	34.0	20.0
	10	3.0	37.7	19.3
	13	4.0	36.0	25.5
ジャスター	7	4.2	38.2	23.6
	10	3.4	39.3	22.8
	13	3.4	39.8	23.0

第4表 摘心処理部位による開花期の花部の生育

品種	摘心部位	項目			
		側枝長	花穂長	花数	花数比率
黒川早生	7枚	40.1	12.0	17.2	0.7
	10	45.7	14.5	18.2	0.8
	13	42.8	14.6	16.6	0.9
寒千鳥	7	44.5	16.4	18.3	0.9
	10	45.3	15.4	18.8	0.8
	13	43.4	15.9	17.3	0.9
アーリーローズ	7	37.8	11.6	16.6	0.7
	10	38.8	13.2	16.4	0.8
	13	36.9	12.3	16.4	0.8
ヨセミテ	7	29.5	9.5	20.0	0.5
	10	31.5	9.8	22.7	0.4
	13	29.8	9.0	22.0	0.4
ジャスター	7	33.1	10.8	20.4	0.5
	10	33.6	10.1	20.1	0.5
	13	32.5	9.6	20.8	0.5

く、分枝数では10枚区、13枚区で発生が多い。これは葉節位が多くなれば側枝の発生節位が多くなるので摘心処理時期とは大きな関係はないと思われる。

開花期における花部の生育は第4表に示すごとく、側枝長では草丈と同様の傾向であり、側枝長に比例して花穂長の伸びも良い。また花穂長に対する花数比率も10枚時摘心処理区が良く品質がすぐれている。

ブランチング系ストックは秋まき栽培の場合、本葉7～8枚で摘心処理をおこない3～4本の側枝の伸長を促しているが、春まき栽培の場合、気温の上昇期にあたる

ので、低温に対する感応期間がやや短いため早期の摘心は苗令が小さく花芽分化に長期間を要し、その後の側枝の伸長および花穂長に影響を与えたものと思われる。

春まきにおける摘心処理は、葉節位がやや高い部位で処理した方が生育は良く、その節位は10枚程度と考えられる。

さらに摘心処理と開花期の関係は第2図に示したが、摘心処理による影響は早期摘心区で開花がやや早く、品種別ではアーリーローズ・シャスターでこの傾向が明白である。その他の品種では処理区間の差は認められない。

また開花揃に関しては10枚時摘心が良く平均5日で開花終期となっている。

分枝系品種の場合、無分枝系より品種による開花期に開きがあるが、摘心処理別による影響は少ない。

以上の結果から春まき栽培の摘心処理時期は品種による変動はあるが、10枚時摘心が適処理と思われる。

4. む す び

1. 品種は先勝の雪、白王等の低温要求度の小さい系統が適している。
2. 播種期は2月20日前後と思われる。
3. 開花期は各品種の組合せで6月上・中旬になる。
4. 春まきの場合、草丈の伸長と花穂長および花数に影響は認められない。
5. 分枝系ストックの摘心処理時期は本葉10枚程度が良い。
6. 分枝系ストックは摘心処理時期による開花期に大きな影響は認められない。

ビニールハウス内の床土取扱いに関する研究

和泉昭四郎・川村 邦夫・高橋 精一

(宮城県農試)

1. ま え が き

ビニールハウスは大型化し、固定化する傾向にある。一方、労力や資材の面から一作ごとの床土の交換は不可能になり、床土の連用をやむなくされ、連作による種々の障害がおこっている。これら連作障害は土壤病害によるものと、塩類の集積による濃度障害が考えられる。本試験は、1962年から1966年まで5カ年にわたって、床土の取扱いが濃度障害の対策となり得るか否かについて検討した。

2. 試 験 方 法

試験は132㎡のビニールハウスで3形態の肥料を用い、区の構成は第1表のとおりで、1区20株、2反覆で行なった。

ベットは巾1.2m、四方を板で仕切って1区5.4㎡の独立した区を作り、厚さ0.05mmのポリフィルムを敷いて15cmの厚さに床土を入れた。ベットの中央部には、深さ10cm、巾30cmの溝を作り、そだを入れて暗きょ排水溝を作った。床土は土壤病害予防のため、毎年クローロピクリンで消毒した。

作物は春作にキュウリ(品種松のみどり)、秋作にレタス・トマトを用い、5年間に延べ7作を同一区の構成で栽培した。春作における年次別耕種条件は第2表のとおりである。栽植距離は株間40cmで2条千鳥植えとした。1966年はハウス改築のため、定植期が遅れ生育に若干の影響が見られたが、その他管理は慣行に準じてほぼ同様になるように努力し、自然災害や土壤病害は発生しなかった。

調査は定植時の草丈、葉数、活着の良否と収穫果数、果重、品質について行なった。また、土壤は作付け終了後に携帯用電気伝導度計(CM-3型、東亜電波)で乾土1:水2によるE.C.値を測定した。

3. 試験結果と考察

1. 床土の取扱いが塩類集積の推移におよぼす影響について

春作キュウリ作付け終了後の跡地土壤の電気伝導度測定結果は第1図のとおりである。

無機質・更新区は、各年とも最低のE.C.値を示し、0.8から1.2の範囲で経過した。

無対策連用区は各肥料とも2年目からE.C.値が上